



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

小学校1年生における正しい箸の持ち方の習得： 持ち方指導後の継続的な声かけ効果について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山,英吏子, 今,里衣, 福地,香代子, 鳴瀬,彰子, 鈴木,千夏, 南,道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159377

小学校1年生における正しい箸の持ち方の習得

— 持ち方指導後の継続的な声かけ効果について —

東京学芸大学附属小金井小学校	横 山 英吏子
東京学芸大学附属世田谷小学校	今 里 衣
東京学芸大学附属竹早小学校	福 地 香代子
東京学芸大学附属大泉小学校	鳴 瀬 彰 子
東京学芸大学附属特別支援学校	鈴 木 千 夏
東京学芸大学生活科学講座	南 道 子

目 次

要旨	90
緒言	90
実施方法	91
結果	92
考察	95
参考文献	95

小学校1年生における正しい箸の持ち方の習得

— 持ち方指導後の継続的な声かけ効果について —

東京学芸大学附属小金井小学校	横 山 英吏子
東京学芸大学附属世田谷小学校	今 里 衣
東京学芸大学附属竹早小学校	福 地 香代子
東京学芸大学附属大泉小学校	鳴 瀬 彰 子
東京学芸大学附属特別支援学校	鈴 木 千 夏
東京学芸大学生生活科学講座	南 道 子

要旨

東京学芸大学附属小金井小学校、附属世田谷小学校、附属竹早小学校では2017年から1年生を対象に共通の内容で箸の正しい持ち方指導を行っている⁽¹⁾。併せて、指導前後の正しく箸を持てている人数把握に努め、指導の効果を検証している。2017年では、栄養教諭による箸の持ち方指導の前後での箸の正しい持ち方率を目視で計測して比較した。また、保護者のアンケートにより、家での持ち方指導の有無や、保護者からみて児童が持てているかの調査を行った。更に、冬休みには家庭で箸の持ち方指導を励行した。2年目⁽²⁾は、1年目と同じ指導を行った上に、箸の持ち方に自信の無い児童に対して栄養教諭が個別に指導を行って、正しく持てる人数が前年よりも増えたか確認した。その結果、前年度よりも正しく箸を持てるともう少しで正しく箸を持てる児童の数が前年度を上回り、個別指導の効果が実証された。

今年度は指導後に、家や学校での声かけを行い、従前通りワークシートで持てていたかどうかの確認を担当や栄養教諭がする事で、積極的に持つ気持ちを励起させ、その結果を検証した。

緒言

中国では、紀元前3世紀には、食事は手食が主で、箸は汁を飲む時に実をすくう時に使うと秦漢時代の書物に記されている。時代は下って紀元3世紀の魏志倭人伝には、日本人が手食をしていると記されている⁽³⁾。そして我が国に箸が伝わったのは7世紀以降で、当時すでに中国に普及してからである。

つまむ、寄せる、ちぎる、混ぜるなど二本の棒で様々な食事場面に活躍するものである。しかし、それゆえ幼少期に正しく持つのは難しい。赤崎ら⁽⁴⁾の調査では、箸を正しく持てる幼児及び小学校低学年の児童はほとんどいないとしている。幼稚園児はスプーンの次にフォーク、最後にお箸の順で使われるという。これは、手でものを握る次に指を動かす動作が身につくという事を意味している。

箸の持ち方は幼児期に体得するものであるが、その年齢については小学校低学年までにと言われている。それを過ぎると、箸を正しく持てなくても食事に不自由する事がなくなり、そのまま大人になってしまう事が多い。また、箸の持ち方を注意する人間は家族以外では考えにくく、家族が子供の箸使いに無関心であると、正しく持てない大人になる可能性が大である。立屋敷ら⁽⁵⁾は、正しい箸の持ち方は8歳で27.3%であり、11歳で38.47%としている。附属三校の小学校1年生は7歳であり、我々の調査の結果正しい箸の持ち方ができる児童は約1割である。立屋敷らが調査した2005年に比べ、減少しているのは、その後の日本の食生活の変化が影響しているとも考えられる。

大人では、山内ら⁽⁶⁾の報告で、女子短大生87名のうち正確に箸を持てる学生は53名で約6割であった。正確

に持っていた学生の箸指導は幼少期に行われ、6割が幼稚園、次いで3割が小学校であった。これらの事から、家庭もしくは学校で幼少期の正しく持てるようにという箸の介入指導は必要であると考え。

上田らは、2015年度の調理科学会の大会で、幼稚園児に介入試験を行い正しい持ち方は介入前後で、年中児は9.6%から16.7%に年長児は10%から28%に増加したとしている。これら事前事後の数字の違いは年齢が1歳上がるだけで、指の巧緻性が増した事が考えられる。

学芸大学附属小学校では、一昨年度、1年生を対象に教室での箸の持ち方指導後、家庭と連携してワークシートを用いてさらに持ち方が向上するようにしたところ、指導後1か月では正しく箸を持てる児童、または、もう少しで持てる児童の数を合わせると6割から8割に増加した。昨年度は、集団指導では習得が充分ではないので、箸の持ち方に不安を持つ児童に栄養教諭の指導を受けてもらい箸の持ち方を確実に習得してもらった。更に、2年生を対象に箸の正しい持ち方をしている児童数を確認したところ、1クラスだけ正しく持てている児童数が多かった。その理由として、担任が給食を食べる時間に必ず箸を正しく持てているかの声かけをした事がわかった。そこで、今年は従来の取り組みに加え、更に給食時間に声かけを意識的にする事で箸の正しく持てる人数の増加を検討した。

それ以外に、従来通り箸の持ち方指導や保護者に対して箸を正しく持つ事に対するアンケート調査も行った。

実施方法

1) 事前チェック

まず、6月に1名の教員によって、附属世田谷小、附属竹早小、附属小金井小の1年生について箸の持ち方の調査を行った。箸の持ち方を視察し、正確な箸使いをしている児童数について調査した。正しく箸を持てても、実際に食事をするとときに違う箸使いをした者はやや正しく持てるとした。

2) アンケート調査

次に、各校の栄養教諭により保護者アンケートと箸の指導とを実施した。アンケート実施内容は昨年度や一昨年度の附属学校紀要に示したものと同様である。

1. 保護者は正しい箸の持ち方をしていますか
2. ご家庭の食事でお子様の箸の持ち方に気を配っていますか
3. お子様は正しい箸の持ち方をしていますか
4. 3でハイ以外の回答の方にお尋ねします。ご家庭で箸の持ち方練習をしていますか
5. 給食の時間などで箸の持ち方指導（練習）は必要だと思いますか。
6. 箸を正しく使うことは必要だと思いますか。

それ以外に自由記述を行った。

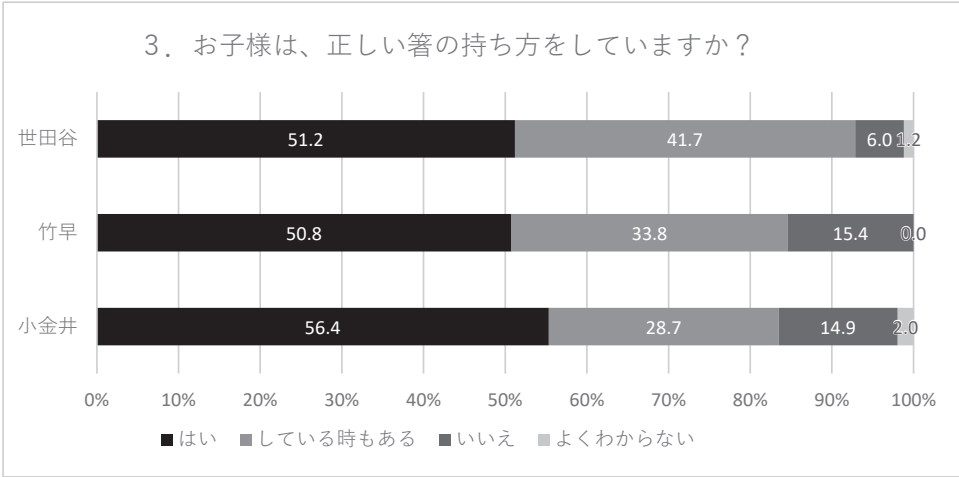
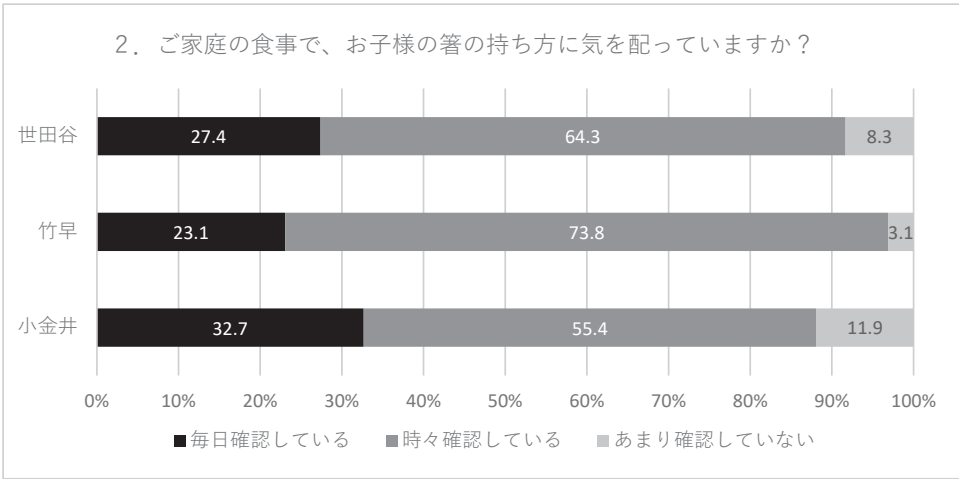
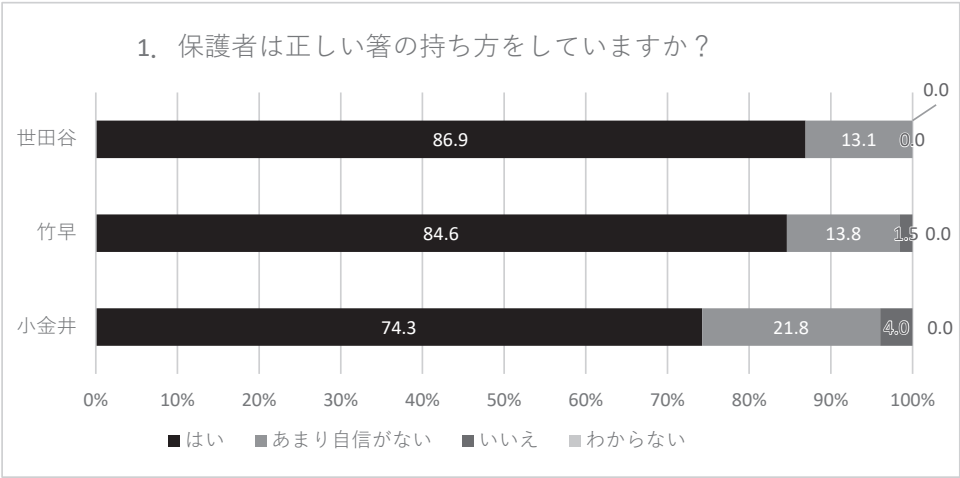
アンケートは各家庭に11月-12月に行い、回収し集計した。

3) 授業での指導

箸の指導内容は、12月に各校各クラス1回、正しい箸の持ち方についての学習をそれぞれの1年生対象に給食時間や生活科の時間、特別活動の時間を使って行われた。個別指導は、各学校で箸の持ち方に不安を持つ児童が、栄養教諭に個別に箸指導をもとめた。家庭での課題としてワークシートを用い、保護者と連携した継続的な指導を行った。介入前に持ち方の確認をした教員が各小学校をまわり、箸の持ち方の上達度を目視により調査した。

結果

東京学芸大学附属小学校三校の保護者アンケートの1～6についてまとめた結果を%表記で下記に示した。



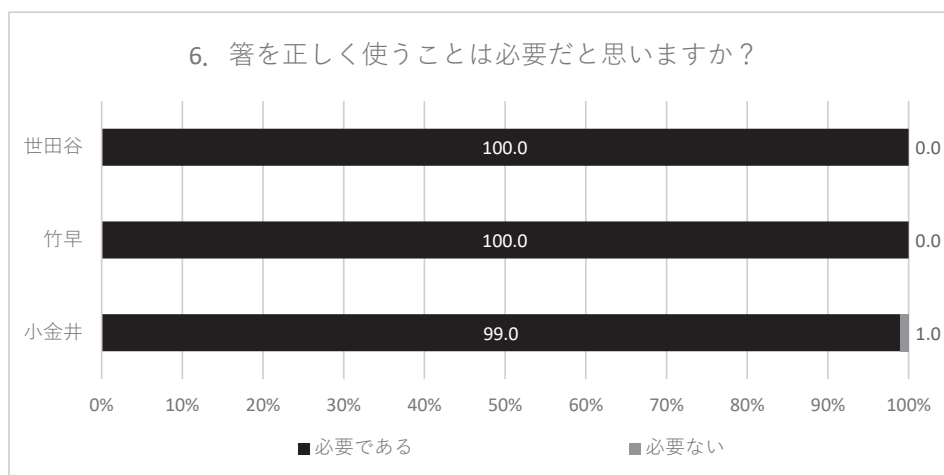
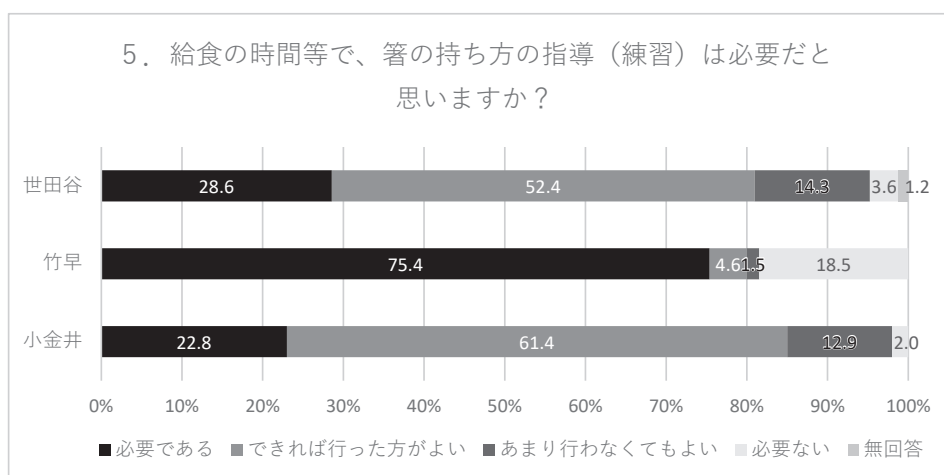
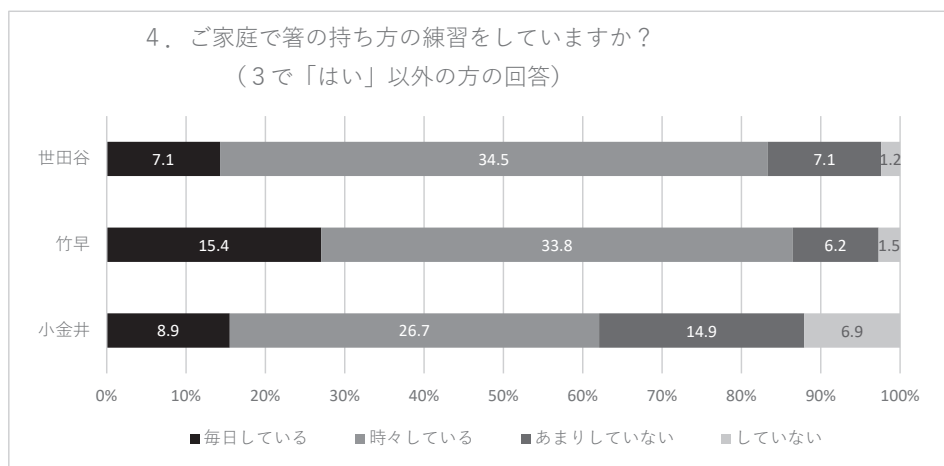


図1-1 保護者アンケートの結果

令和元年11月に学芸大学附属の三小学校を回り、箸の持ち方について事前チェックをした。正しく箸を持てている児童は、世田谷小では14％、竹早小では8％、小金井小では11％、とほぼ例年通りであった。また、保護者アンケートは、「子供が正しく持てている」と思っている保護者は約半数の55％前後である。児童の箸を正しく持てている数との差は、保護者の正しい箸の持ち方についての認識が甘い事を示している。

図1-1の1の回答で、「保護者自身が箸を正しく持てている」と思っている保護者は74-87％で、保護者が「子供に箸の指導を毎日している」と「時々している」を合わせると、約8割前後である事がわかった。附属竹早小では時々している保護者がほとんどであった。また、給食の時間で箸の指導をした方が良いかという問いにはど

の学校の保護者も約8割が行った方が良いと回答している。

また、図1-1の6正しく箸を使う事は必要だと思いますかの問いに、「持てる方が良い」と回答した保護者は、全員と考えて良いが、その理由として、約3割の保護者が「マナー作法として必要である」と考え、次に約1割が「きれいに食べることができる」、「食べこぼしを防ぐ」としている。また、1割近い保護者が「お箸を使用する文化」なので、正しく使用するのは必須だと考えている。

次に、「日本の伝統を守る為」や、「みんなが気持ちよく食事をするため」に大切なこととしている。また、「日本人として正しい所作を身に付けることは大切」、「大人になって恥ずかしくない」、自身が「大人になってから正しい持ち方に直して苦労をした」からという理由が続いている。それ以外に、「箸を正しく持てているとそれが普段の生活を映しているから」や、「脳に良い影響がある」、「正しい持ち方と正しくない持ち方があることを知ることが大事」、「心をこめていただくことにも繋がる」なども、箸の持ち方を正しく持つために必要な事としている。「一生のことだから、しつけとして大切」、「効率が良い」、「日本人として正しい所作を身に付けることは大切」なども理由としている。

表1 指導前後の正しい箸の持ち方をしている児童数の変化（2019年度）

	正しく持てている 前 → 後 (%) (%)	もう少しで正しく持てる 前 → 後 (%) (%)	正しく持てていない 前 → 後 (%) (%)
附属世田谷小	14→27 (13.6) (27.0)	55→37 (53.4) (37.0)	34→36 (33.0) (35.0)
附属竹早小	8→17 (12.7) (25.8)	29→32 (46.0) (48.5)	25→17 (39.7) (25.8)
附属小金井小	11→30 (10.5) (28.6)	68→69 (64.8) (65.7)	28→6 (26.7) (5.7)

指導後の正しい箸の持ち方ができる児童数は、3年間の取り組みでいずれも、指導後は正しく持てている、またはもう少しで正しく持てる児童の数が増加した。正しく持てていない児童数が、附属竹早小、附属小金井小とも、2017年の栄養教諭による授業での指導と冬休みの家庭での指導のみの時のよりも減少した。（それぞれ、39%→27%、18%→4.9%）。これは、授業での指導以外に声かけをすることで、児童が箸を正しく持つ意識を持つ機会を増やすことになったからと推測される。附属世田谷小は増加傾向（27%→35%）であった。

指導後の正しく箸を持てるようになったかのチェックまでの声かけは、附属世田谷小では給食時に栄養教諭が「お箸を正しく持てているかな?」「練習してみようね」という声かけ指導を、授業後の給食時間中に継続し5回行った。持つことに苦手意識があったり、誤った持ち方をしている子どもに対しては、指の位置を正しい位置に一人ひとり持ち替えさせながら確認をした。担任教諭の指導としては、栄養教諭と一緒に「お箸持てているかな?」と声かけをするクラス担任と、関与せずに見守るクラスがあり指導方法は統一しなかった。

附属竹早小では、「活動を思い出して、給食を食べているかな?」、「おうちで家族と一緒に確認しているかな」という声かけを栄養教諭が給食時にクラスを回って3回ほど行った。これらのことから最終的な数値の違いが出たのではないかと考えられた。

附属小金井小では担任と栄養教諭の両方で声かけをするだけでなく、一つのクラスでは担任による個別指導を行ったことで、正しく持てている児童が事前には1名だったが、指導後には11人になった。

考察

今年度の事前事後の正しく持てている・もう少しで正しく持てる児童の数は、昨年度と一昨年度の事前事後の正しく持てている児童の数、もう少しで正しく持てる児童数と傾向が違い、3校にばらつきがみられた。この理由として、3校の声かけや担任の指導の差によるものだと考えられる。声かけの回数や、声かけだけでなく持ていない児童に個別指導をしたりすることで持てるようになる児童数が増加した。また、小金井小のように児童のことをよく理解している担任の個別指導が効果的であることがわかった。

令和元年は、箸の持ち方がネット上を騒がせていた。また、新聞などでも取り上げられ、朝日新聞では令和元年7月14日に小学校の校長が、お箸を正しく持てると鉛筆も正しくもてるので箸を正しく持つように小学校の低学年で指導をすべきであるとした投書に賛否両論があり、箸の持ち方を正しく持てるようにするよりもっと他の事を小学校では教えるべきであるとか、元小学校教員が自分も正しく持てないが、在職中は忙しくて子供の箸の指導にまで手が回らなかった、また正しく持てない子供が傷つくなど、どちらかという正しく持てなくても良いという意見を載せていた。

家庭での食事が従来の日本食だけではなく、世界の料理も食べるようになり、箸を使う日本食だけの時代と違って、スプーンやフォークのみで朝食や夕食を済ませることもしている。その結果、箸を正しく持つための練習機会が減少し、箸を使わなくても食べられる経験もしてしまう。家庭での食事の変化とマスメディアで示された状況などが合わさり、箸を正しく持てないまま成人してしまう事が考えられる。山下ら⁽⁷⁾は、箸の持ち方が食の欧米化により多様化したとしている。

そこで、ここ3年の取り組みのように、授業での指導で箸が正しく持てる事の利点を学んだり、正しく持つ意味付けが必要となっているのではないだろうか。日本文化の伝承という点では、現在の箸を正しく持てる割合が減っていることは危機感を持って良いのではないだろうか。

山下ら⁽⁷⁾の1936年の調査では、小学校入学時に箸が持てている子供は約7割だったのに、1984年と1997年の調査時には1割に減少したという報告があり⁽⁸⁾、東京学芸大学附属小学校三校の入学当初の、箸を正しく持てている児童の数が1割という数字は他の学校と同じであり、ここ30年間不変ということは、下げ止まりの数と言える。

伝統的な箸の持ち方は、柔らかいものをつまむ時、硬さの違うものを交互に挟む時に失敗が少なく効率的であり、魚を食べるときに箸を開く動作も正しい持ち方の方が鉛筆式の持ち方よりも早いと向井ら⁽⁹⁾が報告している。これら、箸を正しく持つ事の意義や必要性について、また日本文化であり、その継承者である児童たちに箸を正しく持つ事を考えさせる授業を提供していく事も必要ではないかと考える。

参考文献

- (1) 今 里衣, 横山 英吏子, 福地 香代子, 鳴瀬 彰子, 鈴木 千夏, 南 道子 東京学芸大学附属学校 研究紀要 第45集 93-99 (2018)
- (2) 鳴瀬 彰子, 今 里衣, 横山 英吏子, 福地 香代子, 鈴木 千夏, 南 道子 東京学芸大学附属学校 研究紀要 第46集 (2019)
- (3) 向井 由紀子, 橋本 慶子, 長谷川 千鶴 我が国における食事用日本箸の起源と割箸について 調理科学 (10) 41-46 (1977)
- (4) 赤崎 真弓, 小清水 貴子, 元田 美智子, 松野 絵里, 中路 知恵, 林 明子, 小濱 有里子 長崎大学教育実践総合センター紀要 (9) 129-138 (2010)
- (5) 立屋敷 かおる, 山岸 好子, 今泉 和彦 小中学生における箸の持ち方と鉛筆の持ち方との関係 日本調理科学会誌 38 335-363 (2005)

- (6) 山内 知子, 小出 あつみ, 山本 淳子, 大羽 和子 食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー 調理科学会誌43 (4) pp.260-264 (2010)
- (7) 山下 俊郎, 幼児期における基本的習慣の研究 (第1報告) 教育 4 648-672 (1936)
- (8) 谷田貝 公昭・村越 晃・伊藤 野里子・松川 秀樹・高橋 弥生・生駒 恭子. 箸の持ち方・使い方の実態—1984年と1997年の調査から—家庭教育研究 (4) 1-1 (1994)
- (9) 向井 由紀子, 橋本 慶子 箸の使い勝手について 箸の持ち方 (その2) 日本家政学会誌 32 622-627 (1981)